



補高の効果があると報告されても、すべての場合にあらゆる問題を解消するというわけではない。すでに腰痛にかかった人々の中で、補高すると六割ないし九割は症状が軽減するという報告なので、ケースバイケースでやってみないとわからない、という現状である。

もし五〇程度の脚長差があれば、それを完全に補高することは無理ではないが、果たして腰痛を予防する意味で補高する価値があるのかという議論がある。一方、小さな脚長差といえども、常時にその非対称性を以て歩き回ると、骨盤帯・腰部などがどれだけ障害を蓄積し得るのかがまだ十分研究されていない。他方、もし身体の発達に五〇程度の脚長差が起こつたならば、身体はそれに慣れて、身体成長が済んだ後に補高すると、身体になおさらの混乱をきたすにほかならない、という理屈もある。

この課題はまだ十分研究されていないために、われわれは数〇程度の脚長差とその影響に対して暗中模索である。五〇の脚長差であれば、まず二〇三〇の補高を試み、楽になるかまた機能向上があるかを調べるといふ現状である。今後は、少しずつこの問題が解明されることを期待したい。

プロフィール

(Paul D. Andrew)

- ◇一九四七年、米国オハイオ州生まれ
- ◇一九六九年、南カリフォルニア大学卒業(理学療法学)
- ◇一九七四年、龍谷大学仏教学研究科修士課程修了
- ◇一九八二年、アイオワ大学理学療法学大学院プログラム博士課程修了
- ◇日米で臨床経験を積んだ後、一九八九年ジョージア州立大学講師
- ◇一九九三年、広島大学医学部保健学科に着任



昨年の夏、瀬戸大橋にて医局の同僚たちと

社会

よって特徴づけられる共通の文化を共有した人間集団の全体として定義されています。この定義によれば、ある集団の行動や考え方を理解しようとするば、まず第一に、その集団の考え方を最も的確に表現している前述の社会的側面を分析する必要があります。そのため、私は、日本の大学院で研究を行いたいと思った時―私はまだ私の母国ブラジルにいました―初めて幾つかの日本社会の慣習やマナーについて調べました。また、幾つかの日本人の日常生活について知るために、日本の歴史、社会的側面と一般常識について多くの本やパンフレットを集めま

日本の社会について

歯学研究科歯学臨床系一年

エドゥアルド・ホリン・テイシエイラ

した。私が日本の社会について知れば知るほど大変興味深く、全く新しい世界のこのように思えました。

私 にとつて、私の国ブラジルの社会と日本の社会との相違に関して最も興味あることの二つは、日本の社会は歴史が古い為、今なお日常生活において見受けられる多くの古い伝統と慣習が日本には存在していることでした。

そして、この日常生活には、様々なところで見られるハイテクノロジイや科学の進歩と今なお日本人の心に生きている古来からの文化とが共存しており、私にとつてこのことが大変興味深く、おそらく世界の民族の中で類を見ない珍しいことである、と感じています。

さ ちに考えに入れておくべきもう一つの興味ある事実は、私は、人々の行動パターンと日常生活の様々な側面で、欧米と東洋の社会様式の相違を見る事ができることです。私にとつて、その相違について比較することは難しく、どちらがよいとはいえないと考えています。

最 後に、日本の社会のようなアジアの文化社会の中で生活することは、大変興味がない印象的な経験であることを、私は、アジアの文化社会で生活する機会をもつ人々、とりわけ欧米の人たちに伝えたいと思っています。

プロフィール

(Eduardo Rolim Teixeira)

- ◇一九六八年、ブラジル共和国リオグランデスール州ポルトアレグレ市に生まれる
- ◇一九九〇年一月、国立リオグランデ大学歯学部卒業
- ◇一九九三年四月、文部省国費留学生として来日
- ◇一九九四年四月、広島大学大学院歯学研究科歯学臨床系歯科補綴学第一専攻入学



オラ 今日! Oia!